

保育の協働性に対する保育者と家庭の意識に関する研究

研究代表者	鈴木 智子（仁愛大学 准教授）		
共同研究者	矢藤 誠慈郎（岡崎女子大学 教授）	森 俊之（仁愛大学 教授）	
	石川 昭義（仁愛大学 教授）	西村 重稀（仁愛大学 名誉教授）	
	青井 夕貴（仁愛大学 准教授）	野田 美樹（岡崎女子短期大学 准教授）	
	森 美利花（岡崎女子大学 助手）	舘 直宏（わっか保育園 保育士）	

研究の概要

本研究では、保育所と家庭の連携における協働性の意識を調べることを目的とした。研究1では、100カ所の保育所の主任保育士（各保育所1名）と保護者（各保育所3歳未満児クラス10名、3歳以上児クラス10名）を対象に質問紙調査を行った。研究2では、調査協力に同意を得られた保育所4カ所の主任保育士を中心にインタビュー調査を行った。

研究1 質問紙調査

質問紙を送付した100カ所中81カ所の保育所から返送があった。主任保育士用質問紙が73名（回収率73.0%）、保護者用質問紙が1,501名（返送のあった保育所中の回収率92.7%）の返送であった。

- (1) 基礎的情報：主任保育士、保護者ともに全ての項目において、平均点が3.0以上という結果が出ており、両者が連携についての実態、効果、工夫、満足度・信頼関係を高く評価していることが示された。
- (2) 連携の対応：情報交換については主任保育士と保護者の間にほとんど差は見られなかった。子どもについての共有、協力体制、対等な立場での会話については、保護者の方ができていると捉えていた。両者ともに子どもの様子を伝えることよりも保育の内容やねらい・子育ての方針を伝えることが低く、子どもの様子の背景にある保育士・保護者の関わりやそのねらいについて話されることは、比較的少なかった。年齢クラス間の差については、両者ともに未満児クラスの方が高く回答しており、その項目数は主任保育士より保護者の方が多かった。双方向性については、両者が保育所からの情報伝達が家庭からの情報伝達より多いと捉えていた。
- (3) 連携の効果：連携の結果、自身や相手の子どもの見方や関わり方が変化したかについては、両者ともに相手よりも自分が変化したと捉えており、保護者よりも主任保育士の方がその変化を大きく捉えていた。この背景には、自身・保護者どちらに対してもともに変化を捉えるという専門性の高さがあると考えられる。子どもの成長については、両年齢クラスにおいて保護者が高く捉えており、未満児クラスで特にその傾向が見られた。
- (4) 連携の工夫：頻度の異なる3タイプのコミュニケーションについては、ほとんどの項目で主任保育士の方が高く捉えていた。子どもの内面や発達の家庭の伝達については、1項目を除いてほとんど差は見られなかった。年齢クラス間の比較では、保護者のほとんどの項目において未満児クラスの方が高いと捉えられていた。
- (5) 連携における満足感、信頼関係：全ての項目において、主任保育士より保護者が高く評価しており、年齢クラス間の比較では保護者は全て未満児クラスの方が高かった。
- (6) 保護者の協力：年齢クラス間の比較では、保育所からの連絡への応答は未満児クラスの方が高いが、保育所への協力については、以上児クラスの方が高く、背景に子どもの年齢が上がるにつれて協力する機会が多くなることが背景にあると考えられる。
- (7) 自由記述：主任保育士の連携の工夫とあると良いと思う機会については、直接的な会話と行事の参加が挙げられていた。保護者が捉える保育士の工夫とあると良いと思う機会については、同じく直接的な会話と行事の参加が挙げられていたが、未満児クラスの工夫している点として、連絡帳の利用が半数以上を占めていた。特に未満児クラスでは、子どもについての詳しい情報提供、悩みや相談を上げていることが多く、頻度が高く応答的な対応が求められていることがわかる。

研究2 インタビュー調査

- (1) 連携における対応、満足度について保育士よりも保護者が高い評価をしていることについては、保育士が保護者の考えを丁寧に汲み取り、慎重に信頼関係を築いていこうとする姿勢がうかがわれた。
- (2) 保育士の子ども理解・関わり方について、保護者よりも保育士の方がより変化したと捉えていることについては、保育士の観察力と保育士同士の同僚性によって培われる専門性があることがうかがわれた。また、

保護者の変化がそれほど見られなかったことについては、期待はするが、変わることを求めなくて良いとの回答があり、子育ての楽しさを共有してもらいたいという考えが読み取れた。

- (3) 保育士からの情報伝達が家庭からの情報伝達よりも多くなることについて、保護者の個々の意識の違いや時間の余裕がない中で、家庭からの情報伝達を求めにくく、できるだけ保育所での様子を話そうという意識が強く読み取れた。
- (4) 年齢クラス間の差については、多くの園で用いられている連絡帳の様式の違い、保育士が一人で見える子どもの数の違い、生活習慣の自立に伴い連携の機会の減少などが理由としてあげられた。また、以上児では伝える力を育む、子どもと保護者のコミュニケーションの機会を増やすという見解がみられ、発達過程や小学校への接続を意識していると考えられる。一方で、以上児クラスにおいてもきめ細かい対応の必要性を指摘する回答もあった。

総合的考察

(1) 主任保育士と保護者の意識の共通点と相違点について

まず両者が連携に対して概ね良い評価をしているといえる。また多大にどの程度情報交換しているのかについての認識も一致していた。

次に、連携の対応において、保育士からの情報伝達が多いこと、子どもの様子を伝えることは多いが、その背景にあるねらいや方針について話すことは少ないことが共通していた。しかし、その背景にある理由については相違点が見られた。情報伝達の違いについて、保育士は家庭からの情報収集が少ないと実感しているが、その専門性の高さから保護者の意識の多様さ、忙しさ、プライバシーへの配慮があり、十分にできないと感じていた。一方で、保護者は自由記述から家庭の様子を聞いてほしいという要望は見られず、互いの情報伝達の量の違いに疑問や要望はなく、子どもの様子を伝えてもらうことを主に捉えていると考えられる。ねらいや方針について話すことが少ないことについても、保育士は保護者への配慮から子どもの様子を伝えることを優先し、保護者は子育ての方針に対して意識があまり向いていないことが理由として考えられる。連携の効果についても違いが見られたが、同様に保育士の専門性の高さが影響していると考えられる。

(2) 年齢クラス間の違いについて

主任保育士も保護者も未満児クラスの方が対応や満足度について高く評価しており、保護者の方がよりその傾向が強かった。このことから未満児クラスでは連携を高く評価するが、以上児クラスになると評価が低くなっていくと考えられる。対応として、子どもとのコミュニケーション力を生かして情報伝達する、保育士全員できめ細かい対応をしていくなど、構造上の問題に対応するような内容が挙げられた。また、普段の連携においても年齢上の違いという問題に対しても保育のねらいを説明しながら連携を強固にしていくことが求められる。

保護者については、質問紙調査の自由記述から、親になりたてで保育所の支援を求めるという関係性から、子どもの成長とともに徐々に支援される側でなくなるというプロセスが見て取れた。しかし、一方で質問紙調査の情報伝達の違いについての考察から、保護者は園から保育というサービスを受ける側であるという意識がうかがわれ、保護者が保育士に家庭の情報を伝え、影響を与えるという意識は強く見られなかった。したがって、保育所に在籍して年月を経る中で、支援される側からの自立という変化は見えて取れるが、協働性を意識するまでには至らないと考えられる。今後、保護者と保育士の関係性の変化の過程を踏まえたコミュニケーションのあり方に保育士が意図的、計画的に配慮していくことがより求められると考えられる。

(3) 今後の課題

保育の専門家である保育士には連携をより強めていく努力が求められるが、専門家ではない保護者に保育士と同程度の努力が求められるとは限らない。また「協働」の説明にあるように「共に子どもを育てる」という共通の目標を持つても、「互いの固有性と主体性を尊重し合うことが求められる関係」であることから、保育士とは異なる連携の内容、方向性があり得る。今回は、保育士と保護者の連携に対する意識の共通性、相違性を調べるため、同じ内容で比較検討を行ったが、連携において保護者が保育士とは異なる努力や異なる内容、方向性をもって進めていくことの可能性については、今後議論を重ねていく必要があると考えられる。

キーワード：協働、双方向性、3歳未満児、3歳以上児、保育士の専門性

問題と目的

本研究では、平成28年度研究テーマである「保育所保育等と家庭の子育てとの連携・協働」に沿って、保育士

と保護者が協働で子どもの保育に関わることに對して、どのような意識を持っているのかについて、明らかにしていくことを目的としている。以下、保育所と家庭の連携をキーワードに研究の背景について論じていく。

1. 保育所保育指針にみる保育所と家庭との連携

近年、わが国では子育て環境の大きな変化に伴い、親の育児不安や虐待など、家庭における課題が顕著になっている。そのような状況を踏まえ、平成13年の児童福祉法の一部改正により、保育士資格が法定化され、保護者に対し保育に関する指導を行うことが保育士の業務に加えられた。さらに平成21年度から施行された保育所保育指針（以下、指針）においても、保護者に対する支援が特化され、保育所は保護者への支援も重視することを求められるようになった。

改定された指針の総則では、保育所の特性として「保育所は、その目的を達成するために、保育に関する専門性を有する職員が、家庭との緊密な連携の下に、子どもの状況や発達過程を踏まえ、保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」と記されている。つまり、子どもの健全な心身の発達を図り、子どもの最善の利益を守るためには、保育所と家庭との緊密な連携が基盤となると考えられていることがわかる。

この子育て支援と家庭との連携について、北野（2014）は、子育て支援とは「保護者の家庭保育に関して、保護者を直接支援とするものである」、また家庭との連携とは「子育て支援とは視点を転換し、園での集団保育における個々の子どもの育ちを促し、子ども達の権利を守るために、子どもになされる支援である」としており、子育て支援と家庭との連携を区別している。大豆生田（2016）は、子育て支援の中に家庭との連携を内包しているが、『支援』よりも『連携』や『協働』として、子育て支援・保護者視点を捉え直していくことが重要である」としている。両者の子育て支援と家庭との連携の位置付けは異なるが、保育士が支援する側・保護者が支援される側という関係ではなく、保育士と保護者が子どもの最善の利益を追求するために対等な立場で協力する関係を築いていくことに焦点を当てていく必要性を指摘しているという点で共通している。

これまで保育者と保護者の関係は、子育て支援の文脈で研究されてきたが、近年上記の指摘も含めた連携についての研究が進められるようになってきた。日本保育協会保育科学研究所では、平成27年度に「保育所保育と家庭保育との連携・協働」を研究テーマとしており、イベントサークル、ドキュメンテーション、食事、保育環境など様々な視点から連携についての研究が行われた。このうち、保育士と保護者の日常的なコミュニケーションにおける連携を扱った本グループの研究（石川ほか、2015）について概観していく。

2. 平成27年度保育科学研究の概要

保育所保育指針解説書（2008）では、連絡ノート、送迎時の対話、所内の掲示など、保護者の子育ての自信や意欲を高めることにつながる伝え方を工夫することが望

まれている。しかし、どのような立場の保育者がどのような年齢別にどのような内容をやり取りしているのかなどという具体的な実態は明確にされていない。また、指針では、「子どもの生活の連続性」を踏まえた家庭及び地域社会との連携が求められているため、具体的な連続性の内容や程度などについて調査することで、連携の中の「連続性」に対する意識や実態も明らかにする必要があると考えた。

以上のような背景に基づき、平成27年度には、現在の連携がどのような形態で行われているのか、保育所が保育をどのように記録し、保護者に伝達しているのか、保育所が今後の連携の方向性をどのように検討しているのか、同時に、さまざまな形態による連携において、どのような困難が生じているのかなどを明らかにするため、「保育所と家庭との連携に関する研究（研究代表者：石川昭義）」をテーマに研究を行った。この研究の中では、「保育所保育と家庭との連続性」を「保育所でのやり方（進め方）が理解されて、家庭での対応と同一の歩調がとられていること」と定義した。

明らかになった点を概観すると、家庭との連携については、全体的にみて「十分にできている」または「だいたいできている」と回答されていたが、とくに「定期的な身体測定や健康診断の結果を伝えること」は「十分にできている」という回答が多かった。連続性については、「感染症の予防や健康を支援する（手洗い、うがい、歯みがき等）ようにかかわる」が「連続性は十分ある」との回答が最も多かった。

年齢別にみると、未満児担当者では「一人一人の子どもの園での生活の様子や成長の様子を伝えること」などが「十分にできている」という回答が多かったように、未満児の家庭との連携の方が以上児の家庭との連携に比べて個別的で詳細であった。また、連続性への意識についても、全般的に以上児より未満児の項目の方が「連続性は十分にある」という回答が多かった。未満児に特有の項目として身辺自立を促す関わりを取り上げると、「離乳食に移行するようにかかわる」、「幼児食に移行するようにかかわる」は連続性が高いことが示された。

連続性がないと思う理由としては、保護者が保育所側へ依存する傾向がある、保護者に余裕がない、保育所と家庭の環境が根本的に違うなどがあげられていた。

3. 平成27年度保育科学研究からみえた課題

保護者支援においては、保護者と一緒に子どもを育てていくといった視点が大切であり、保護者とのパートナーシップが求められる（保育所保育指針解説書、2008）。それを踏まえ、昨年度の研究では、保育所と家庭との連携の実態と共に、保育所保育と家庭との連続性に対する保育所での取組と認識を整理した。しかし、保護者からの視点では検討することができなかったため、連続性を踏まえた連携やパートナーシップの実態を検討すること

はできなかった。したがって、本研究では保育士と保護者を対象に調査を行い、両者の意識を調べることで、連携の実態を明らかにしていく。

保育所保育指針では、「家庭」というキーワードと共に「連携」、「連絡」、「協力」が、「保護者」というキーワードと共に「支援」や「相互理解」、「信頼関係」などが使われている。保育所と家庭が真の「パートナーシップ」を目指すということは、単に連絡や相互理解を図るだけではなく、「共に子どもを育てる」という共通の目標に向けて取り組んでいく意識が必要とも考えられる。つまり、家庭との「協働 (collaboration/cooperation)」である。社会福祉用語辞典 (山縣・柏女, 2009) において、協働とは、共通目標に基づく複数の個人や集団が、それぞれのもつ制約を越えて目標を実現するために、共同活動における役割分担を明確にし、相互に他者への協力と、時には批判的緊張関係をも含みながら進めていく活動のあり方とされている。さらに、個人や集団は対等な関係にあり、互いの固有性と主体性を尊重し合うことが求められる関係だとも示している。

この連携や協働を捉える視点について、保育士と保護者の関係の変化に焦点を当てた子育て支援研究 (林, 2009; 小川, 2011) から得られた知見を参考にしていく。林 (2009)、小川 (2011) の研究では、保育士と保護者が情報交換や共有を通して、相互に影響を与えあいながら、関係が変化していく様子が示されている。情報交換については、小川 (2011) では、保育者が「子どもがよりよく変わるプロセスを可視化して示すこと」が必要であることを指摘しており、林 (2009) においても子どもの様子を詳しく伝えること、また書かれたことに対する読み取り方、受け止め方が変化していくことが指摘されている。したがって、連携において、まず情報交換や共有が確実に実施されているかどうかが重要であると考えられる。

しかし、それらの連携における対応が、保育士と保護者の関係の中だけで閉じてしまうのではなく、それぞれの子どもへの対応に生かされ、子どもの成長に繋がっていく必要がある。したがって、本研究では、連携の対応、その効果を取り上げる。さらに、上記の研究では、保育士が親へ影響を与え、親のみが変化するという一方で固定的な関係ではなく、保育者も同時に変化しながらその関係がより良いものへと変わっていくことが示された。このことから、本研究でも保育者と保護者が相互に影響を与える双方向性という視点も取り入れていく。

また、保護者への保育や子ども理解を促す手段として、保育の可視化が指摘されている (坂崎ほか, 2013; 那須, 2014) が、可視化すべきは子どもの表面的な姿ではなく子どもの内側にある発達であるとの指摘 (前原・大場, 2003) もある。これを受けて、連携における工夫として、内面や発達の過程の可視化という質に関する工夫と頻度の異なるコミュニケーションという量の工夫に焦点を当

てていく。

さらに、上記の対応、効果、工夫といった事実についての認識とは別に、それらに対する満足感や連携の積み重ねによって形成される信頼関係についての意識も重要となる。このことから、連携や保育に対する満足感や信頼関係の構築に対する意識についても調べていく。

以上のことから、子どもの保育所生活と家庭生活の連続性を保つためには、保育所と家庭がそれぞれに抱いている連携の意味やその効果などを含んだ協働に対する意識について明らかにする必要があるという課題が見出された。本研究では、保育者と保護者との間の日常的なコミュニケーションの様々な局面について、協働の観点から各々の意識を定量的に調査し、分析していく。また、インタビューという質的調査を実施して、保育所と家庭との協働をより具体的に理解していくこととする。

4. 本研究の目的

保育所と家庭が双方の立場、生活、役割を相互に理解し、互いが協力して子どもを育てていくという協働の意識を形成することが、子どものより良い発達と最善の利益に寄与すると考えられる。したがって、本研究では、保育者と保育所に在籍する乳幼児の保護者を対象に、保育所と家庭が連携する際の協働に対する意識にどのような共通性や相違性があるのかを明らかにし、保護者と協働して乳幼児の発達を支えていく保育者の役割について検討することを目的とした。

研究 1 質問紙調査

1. 目的

研究 1 では、保育者と家庭との連携の意識の共通性・相違性を明らかにするため、保育所保育士とその保育所に在籍する保護者を対象に質問紙調査を行い、各々の意識について定量的に検討することを目的とした。

2. 方法

- (1)対象者：福井県内から100カ所の保育所（公立50カ所、私立50カ所）を無作為に抽出した（認定こども園は除外した）。各保育所の主任保育士1名（計100名）、各保育所の保護者20名（3歳未満児クラスの保護者10名、3歳以上児クラスの保護者10名、計2,000名。保護者の選定は所長に一任した）に質問紙への回答を依頼した。
- (2)手続き：各保育所に質問紙（主任保育士用1通・保護者用20通）を郵送した。保育所には、主任保育士の回答、保護者への質問紙の配布及び回収、所内でまとめて返送することを依頼した。また、研究概要、記入上の注意、倫理的配慮について記載した依頼状を3通（所長用、主任保育士用、保護者用）添付した。
- (3)調査内容：主任保育士用の質問紙は3歳未満児クラス

用と3歳以上児クラス用の2種類の記入欄を用意した。保護者用の質問紙は、3歳未満児クラス用と3歳以上児クラス用の2種類の質問紙を作成した（質問項目は同じである）。質問項目は、以下の通りである。全ての質問項目について「あてはまらない（1点）」から「あてはまる（5点）」の5件法で尋ねた。

「連携における対応（9項目）」では「保育所での子どもの様子を保護者に十分に伝えている〔聞いている〕」など情報交換に関する5項目、「子どもの発達や性格の理解を保護者〔保育士〕と共有できている」など共有に関する2項目、協力体制や対等な立場に関する2項目を設定した。

「連携による効果（5項目）」では、「保育士の子どもの理解・見方が変わった」など保育士と保護者の見方や関わり方の変化に関する4項目と子どもの成長に関する1項目を設定した。

「保護者の連携に対する意識を高めるための工夫（5項目）」では、「保護者〔保育士〕との間に日常的なコミュニケーション（送迎時の会話など）が十分にある」など頻度の異なるコミュニケーションの実施に関する3項目と「保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕子どもの内面（感情や意思）を伝えている〔伝えられている〕」など子どもの内面や発達の過程の伝達に関する2項目を設定した。

「連携に対する満足度、信頼関係（3項目）」では、「保護者は保育士との連携に満足している」など連携・保育に対する満足度に関する2項目と信頼関係に関する1項目を設定した。

「保育所に対する協力（4項目）」では、保護者のみを対象とし、「保育所からの書面での連絡（連絡帳・お便り・掲示板など）」には必ず目を通したり、返事を書いた

りしている」など保育所からの連絡や依頼への応答に関する2項目と「保育所の行事などに積極的に参加・協力するようにしている」など協力体制に関する2項目を設定した。

(4)倫理的配慮：質問紙の依頼状には、倫理的配慮（研究参加への自由意志の保障、データおよび個人情報の保護、研究結果の公表等）についての説明を記載し、質問紙の記入・返送をもって、同意を得ることとした。本研究は、日本保育協会保育科学研究所倫理審査委員会の審査と承認を受け、実施した。

3. 結果と考察

(1) 基礎的情報

質問紙を送付した保育所100カ所中、81カ所から返送があった。主任保育士用質問紙の返送が73名（回収率73.0%）であった。保護者からの質問紙の返送は、1,501名（返送のあった保育所81箇所中の回収率92.7%）であった。

主任保育士の属性を表1に示す。50代、40代がともに多く、全員が女性であった。また運営主体は公営と私営がほぼ半数の割合であった。保育士としての経験年数の平均値は26.1年（レンジ：6-40年）、主任保育士の経験年数の平均値は5.6年（レンジ：1-30年）であった。

保護者の属性を表2に示す。3歳未満児クラス（以下、未満児クラス）、3歳以上児クラス（以下、以上児クラス）共に母親が95%以上を占め、その年代は両クラスで30代が最も多く、未満児クラスは次いで20代、以上児クラスは次いで40代が多かった。保護者の子どもの数は、両クラス共に2人が最も多く、未満児クラスは次いで1人、以上児クラスは次いで3人が多かった。

表1 主任保育士の属性

年齢	20代	30代	40代	50代	60代	未回答
	0 (0%)	3 (4.1%)	29 (39.7%)	33 (45.2%)	7 (9.6%)	1 (1.4%)
性別	男性	女性				
	0 (0%)	73 (100%)				
運営主体	公営	私営				
	36 (49.3%)	37 (50.7%)				

表2 保護者の属性

		母親	父親	祖母	祖父	その他
保護者	3歳未満児クラス	707 (96.7%)	20 (2.7%)	2 (0.3%)	1 (0.1%)	1 (0.1%)
	3歳以上児クラス	735 (96.2%)	26 (3.4%)	3 (0.4%)	0 (0%)	0 (0%)
保護者の年代		20代	30代	40代	50代	60代
	3歳未満児クラス	136 (18.6%)	508 (69.3%)	87 (11.9%)	1 (0.1%)	1 (0.1%)
	3歳以上児クラス	40 (5.2%)	491 (64.3%)	231 (30.2%)	1 (0.1%)	1 (0.1%)
保護者の子どもの数		1人	2人	3人	4人	5人
	3歳未満児クラス	244 (33.3%)	346 (47.2%)	116 (15.8%)	24 (3.3%)	3 (0.4%)
	3歳以上児クラス	130 (17.0%)	417 (54.5%)	194 (25.4%)	22 (2.9%)	2 (0.3%)

全ての項目における回答者の平均値（SD）を表3に示した。まず主任保育士、保護者ともに全ての項目において、平均点が3.0以上という結果が出ており、両者が連携についての対応、効果、工夫、満足度・信頼関係を

高く評価していることが示された。主任と保護者の差、未満児クラスと以上児クラスの差を比較するため、t検定を行った結果を表4・5に示した。以下、項目に沿って結果と考察を示していく。

表3 主任保育士・保護者の評定平均値（SD）

		主任保育士		保護者	
		未満児	以上児	未満児	以上児
連携 の 対 応	1-1 保育所での子どもの様子を保護者に十分に伝えている 〔聞いている〕	4.42 (0.58)	4.13 (0.70)	4.46 (0.73)	4.10 (0.97)
	1-2 保育の内容やそのねらいを保護者に十分に説明している 〔説明されている〕	3.62 (0.76)	3.60 (0.76)	3.89 (0.98)	3.77 (1.01)
	1-3 家庭での子どもの様子を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕	4.11 (0.75)	3.73 (0.79)	4.13 (0.93)	3.82 (1.03)
	1-4 家庭での子育ての方針を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕	3.47 (0.79)	3.35 (0.75)	3.37 (1.10)	3.24 (1.07)
	1-5 家庭での子育ての悩みや不安を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕	3.92 (0.79)	3.75 (0.80)	3.86 (1.04)	3.63 (1.10)
	1-6 子どもの発達や性格の理解を保護者〔保育士〕と共有できている	3.96 (0.77)	3.85 (0.74)	4.23 (0.84)	4.08 (0.91)
	1-7 子どもへの関わり方を保護者〔保育士〕と共有できている	3.79 (0.75)	3.76 (0.76)	4.00 (0.92)	3.83 (0.97)
	1-8 子どもの生活の自立について、保護者〔保育士〕と協力体制が とれている	3.86 (0.70)	3.75 (0.71)	4.10 (0.88)	3.95 (0.95)
	1-9 保護者に対して〔保育士と〕、対等な立場で話をすることが できている	3.87 (0.78)	3.90 (0.80)	4.35 (0.81)	4.28 (0.86)
連 携 の 効 果	2-1 保育士の子どもの理解・見方が変わった	4.13 (0.74)	4.08 (0.69)	3.53 (0.91)	3.51 (0.88)
	2-2 保育士の子どもへの日々の関わり方が変わった	4.20 (0.73)	4.14 (0.72)	3.44 (0.90)	3.43 (0.87)
	2-3 保護者の〔自分の〕子どもの理解・見方が変わった	3.82 (0.76)	3.83 (0.73)	3.74 (0.97)	3.74 (0.91)
	2-4 保護者の〔自分の〕子どものへの日々の関わり方が変わった	3.73 (0.72)	3.69 (0.76)	3.60 (0.96)	3.51 (0.96)
	2-5 子どもがより良く成長した	3.92 (0.67)	3.88 (0.63)	4.32 (0.78)	4.09 (0.86)
連 携 の 工 夫	3-1 保護者〔保育士〕との間に日常的なコミュニケーション （送迎時の会話など）が十分にある	4.31 (0.69)	4.04 (0.78)	3.98 (1.04)	3.69 (1.13)
	3-2 保護者〔保育士〕との間に定期的なコミュニケーション （懇談会・行事など）が十分にある	4.24 (0.69)	4.25 (0.71)	3.84 (1.04)	3.93 (1.01)
	3-3 保護者〔保育士〕との間に随時、必要に応じてコミュニケーション が十分に取れている	4.18 (0.62)	4.17 (0.61)	4.15 (0.89)	4.00 (0.95)
	3-4 保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕 子どもの内面（感情や意思）を伝えている〔伝えられている〕	4.03 (0.74)	4.01 (0.76)	4.06 (0.93)	3.90 (1.00)
	3-5 保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕 子どもの発達の過程や見通しを伝えている〔伝えられている〕	4.00 (0.72)	3.97 (0.73)	4.03 (0.93)	3.78 (1.02)
信 満 頼 足 関 度 係	4-1 保護者は保育士との連携に満足している	3.68 (0.75)	3.59 (0.75)	4.33 (0.84)	4.11 (0.95)
	4-2 保護者は貴園の〔保育所の子どもに対する〕保育に満足している	3.70 (0.73)	3.68 (0.71)	4.47 (0.71)	4.26 (0.88)
	4-3 保育士は保護者と信頼関係を築くことができている	4.00 (0.68)	3.93 (0.66)	4.31 (0.79)	4.17 (0.88)
協 保 力 護 体 者 制 の	5-1 保育所からの書面での連絡（連絡帳・お便り・掲示板など）には 必ず目を通したり、返事を書いたりしている			4.74 (0.56)	4.59 (0.69)
	5-2 保育所の行事などに積極的に参加・協力するようにしている			4.58 (0.68)	4.70 (0.55)
	5-3 保育所からのお願い（持ち物・提出物など）に対して、きちんと 対応するようにしている			4.70 (0.53)	4.66 (0.55)
	5-4 保護者会の活動になるべく協力するようにしている			4.16 (0.99)	4.47 (0.75)

注. 項目は、主任保育士用の項目表記としており、保護者の項目表記の異なる部分は〔 〕で示した

表4 主任保育士と保護者の比較（t検定）

		未満児クラス			以上児クラス		
		主任 保育士	保護者	t値	主任 保育士	保護者	t値
連携 の 対 応	1-1 保育所での子どもの様子を保護者に十分に伝えている 〔聞いている〕			0.39			0.26
	1-2 保育の内容やそのねらいを保護者に十分に説明している 〔説明されている〕	<	○	2.24			1.75
	1-3 家庭での子どもの様子を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕			0.18			0.90
	1-4 家庭での子育ての方針を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕			0.89			1.11
	1-5 家庭での子育ての悩みや不安を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕			0.58			1.14
	1-6 子どもの発達や性格の理解を保護者〔保育士〕と共有できている	<	○	2.81	<	○	2.49
	1-7 子どもへの関わり方を保護者〔保育士〕と共有できている			1.88			0.66
	1-8 子どもの生活の自立について、保護者〔保育士〕と協力体制が とれている	<	○	2.71			1.78
	1-9 保護者に対して〔保育士と〕、対等な立場で話をすることが できている	<	○	4.73	<	○	3.60
連 携 の 効 果	2-1 保育士の子どもの理解・見方が変わった	○	>	6.41	○	>	6.62
	2-2 保育士の子どもへの日々の関わり方が変わった	○	>	8.22	○	>	7.87
	2-3 保護者の〔自分の〕子どもの理解・見方が変わった			0.68			1.03
	2-4 保護者の〔自分の〕子どものへの日々の関わり方が変わった			1.46			1.95
	2-5 子どもがより良く成長した	<	○	4.78	<	○	2.67
連 携 の 工 夫	3-1 保護者〔保育士〕との間に日常的なコミュニケーション （送迎時の会話など）が十分にある	○	>	3.64	○	>	3.50
	3-2 保護者〔保育士〕との間に定期的なコミュニケーション （懇談会・行事など）が十分にある	○	>	4.47	○	>	2.59
	3-3 保護者〔保育士〕との間に随時、必要に応じてコミュニケーション が十分に取れている			0.42	○	>	2.14
	3-4 保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕 子どもの内面（感情や意思）を伝えている〔伝えられている〕			0.39			1.22
	3-5 保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕 子どもの発達の過程や見通しを伝えている〔伝えられている〕			0.37	○	>	2.06
信 満 頼 足 関 度 係	4-1 保護者は保育士との連携に満足している	<	○	6.34	<	○	4.42
	4-2 保護者は貴園の〔保育所の子どもに対する〕保育に満足している	<	○	8.54	<	○	5.41
	4-3 保育士は保護者と信頼関係を築くことができている	<	○	3.62	<	○	2.79

注. 項目は、主任保育士用の項目表記としており、保護者の項目表記の異なる部分は〔 〕で示した

t検定の結果、有意差が出た項目について、その差を不等号で示し（ $p<.05$ ）、数値の高いセルに○を記した

表5 未満児クラスと以上児クラスの比較 (t検定)

		主任保育士			保護者		
		未満児	以上児	t値	未満児	以上児	t値
連携 の 対 応	1-1 保育所での子どもの様子を保護者に十分に伝えている 〔聞いている〕	○	>	4.42	○	>	8.03
	1-2 保育の内容やそのねらいを保護者に十分に説明している 〔説明されている〕			0.26	○	>	2.33
	1-3 家庭での子どもの様子を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕	○	>	4.87	○	>	6.02
	1-4 家庭での子育ての方針を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕	○	>	2.60	○	>	2.39
	1-5 家庭での子育ての悩みや不安を十分に聞き取っている 〔聞いてもらっている〕	○	>	2.37	○	>	4.05
	1-6 子どもの発達や性格の理解を保護者〔保育士〕と共有できている	○	>	2.20	○	>	3.30
	1-7 子どもへの関わり方を保護者〔保育士〕と共有できている			0.23	○	>	3.55
	1-8 子どもの生活の自立について、保護者〔保育士〕と協力体制が とれている			1.63	○	>	3.12
	1-9 保護者に対して〔保育士と〕、対等な立場で話をすることが できている			0.77			1.61
連携 の 効 果	2-1 保育士の子どもの理解・見方が変わった			1.14			0.42
	2-2 保育士の子どもへの日々の関わり方が変わった			1.43			0.24
	2-3 保護者の〔自分の〕子どもの理解・見方が変わった			0.00			0.04
	2-4 保護者の〔自分の〕子どものへの日々の関わり方が変わった			0.65			1.84
	2-5 子どもがより良く成長した			0.83	○	>	5.43
連携 の 工 夫	3-1 保護者〔保育士〕との間に日常的なコミュニケーション （送迎時の会話など）が十分にある	○	>	4.03	○	>	5.16
	3-2 保護者〔保育士〕との間に定期的なコミュニケーション （懇談会・行事など）が十分にある			0.71			1.80
	3-3 保護者〔保育士〕との間に随時、必要に応じてコミュニケーション が十分に取れている			0.50	○	>	3.22
	3-4 保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕 子どもの内面（感情や意思）を伝えている〔伝えられている〕			0.00	○	>	3.35
	3-5 保護者〔保育士〕とのコミュニケーションにおいて、〔保育士から〕 子どもの発達の過程や見通しを伝えている〔伝えられている〕			0.30	○	>	5.04
信満 頼足 関度 係・	4-1 保護者は保育士との連携に満足している	○	>	2.41	○	>	4.90
	4-2 保護者は貴園の〔保育所の子どもに対する〕保育に満足している			1.00	○	>	5.03
	4-3 保育士は保護者と信頼関係を築くことができている			1.14	○	>	3.33
協保 力護 体者 制の	5-1 保育所からの書面での連絡（連絡帳・お便り・掲示板など）には 必ず目を通したり、返事を書いたりしている				○	>	4.39
	5-2 保育所の行事などに積極的に参加・協力するようにしている				<	○	3.88
	5-3 保育所からのお願い（持ち物・提出物など）に対して、きちんと 対応するようにしている						1.46
	5-4 保護者会の活動になるべく協力するようにしている				<	○	6.76

注. 項目は、主任保育士用の項目表記としており、保護者の項目表記の異なる部分は〔 〕で示した

t検定の結果、有意差が出た項目について、その差を不等号で示し ($p<.05$)、数値の高いセルに○を記した

(2) 連携の対応について

主任保育士と保護者の回答を比較すると（表4）、情報伝達に関する項目（1-1～1-5）では、未満児クラスの「1-2 保育の内容やそのねらいを保護者に十分に説明している〔説明されている〕」の項目において、保護者の方が高かった。未満児クラスの他の4項目、以上児クラスの全5項目については、差がなかった。共有・協力体制に関する項目（1-6～1-8）では、両クラスで「1-6 子どもの発達や性格の理解を保護者〔保育士〕と共有できている」の項目において、保護者の方が高かった。未満児クラスのみ、「1-8 子どもの生活の自立について、保護者〔保育士〕と協力体制がとれている」において、保護者の方が高かった。「1-9 保護者に対して〔保育士と〕、対等な立場で話をする事ができている」については、両クラスとも保護者の方が高かった。

差があった項目は全て、保護者の方が主任保育士より高く回答していた。主に情報伝達については、一部の項目を除いて主任保育士と保護者の意識は一致しているが、子どもの発達・性格・関わり方の共有や協力体制、対等な立場での会話については、保護者の方ができていると捉えていた。

また、両者ともに、「1-1 保育所での子どもの様子を伝える」よりも「1-2 保育の内容やねらいを説明している〔説明されている〕」は低く、「1-3 家庭での子どもの様子

を聞き取る〔聞いてもらう〕」よりも「1-4 家庭での子育ての方針を聞き取る〔聞いてもらう〕」が低かった。これらのことから、子どもの具体的な様子を話すことは多いが、その背景にある保育士・保護者の関わりのねらいや方針について話されることは比較的少ないといえる。

年齢クラス間の比較をすると（表5）、主任保育士では、情報伝達に関する項目（1-1～1-5）では、5項目中4項目で、未満児クラスについて高く回答していた。共有・協力体制に関する項目（1-6～1-8）では、3項目中、1項目のみ未満児クラスについて高く回答していた。保護者では、情報伝達、共有・協力体制に関する全ての項目（1-1～1-8）において、未満児クラスの方が高く回答しており、「1-9 対等な立場で話すことができる」のみ、差は見られなかった。

また、保育士と保護者が互いに同程度に情報交換や共有ができているかを調べるため、情報伝達と共有の双方向性を表6・7に示した。主任保育士も保護者も共に、主任保育士が未満児クラスについて回答した1項目「1-2 保育の内容やそのねらいを保護者に十分に説明している」を除いて、保育所からの情報伝達が家庭からの情報伝達より高く回答しており、両者共に、保育士からの情報伝達（子どもの様子や保育のねらい・内容）が家庭からの情報伝達（子どもの様子や子育ての方針）より多くなっていると捉えていた。

表6 主任保育士の連携の対応・効果に関する意識の双方向性

連携 の 対 応	1-1	保育所での子どもの様子を保護者に十分に伝えている	未満児	>	t= 3.68	1-3	家庭での子どもの様子を十分に聞き取っている
			以上児	>	t= 1.70		
	1-2	保育の内容やそのねらいを保護者に十分に説明している	未満児		t= 4.34	1-4	家庭での子育ての方針を十分に聞き取っている
			以上児	>	t= 2.84		
連携 の 効 果	2-1	保育士の子どもの理解・見方が変わった	未満児	>	t= 3.25	2-3	保護者の子どもの理解・見方が変わった
			以上児	>	t= 5.49		
	2-2	保育士の子どもへの日々の関わり方が変わった	未満児	>	t= 2.92	2-4	保護者の子どもへの日々の関わり方が変わった
			以上児	>	t= 4.92		

注. t検定の結果、有意差が出た項目について、その差を不等号で示した(p<.05)

表7 保護者の連携の対応・効果に関する意識の双方向性

連携 の 対 応	1-1	保育所での子どもの様子を保育士から十分に聞いている	未満児	>	t= 12.12	1-3	家庭での子どもの様子を十分に聞いてもらっている
			以上児	>	t= 14.42		
	1-2	保育の内容やそのねらいを保育士から十分に説明されている	未満児	>	t= 6.85	1-4	家庭での子育ての方針を十分に聞いてもらっている
			以上児	>	t= 5.54		
連携 の 効 果	2-1	保育士の子どもの理解・見方が変わった	未満児	<	t= 9.66	2-3	自分の子どもの理解・見方が変わった
			以上児	<	t= 15.36		
	2-2	保育士の子どもへの日々の関わり方が変わった	未満児	<	t= 8.43	2-4	自分の子どもへの日々の関わり方が変わった
			以上児	<	t= 2.85		

注. t検定の結果、有意差が出た項目について、その差を不等号で示した(p<.05)

(3) 連携の効果について

主任保育士と保護者の回答を比較すると（表4）、両年齢クラスにおいて、保育士の子どもの理解・見方、関わり方に関する項目（2-1、2-2）については、主任保育士の方が高く、保護者の子ども理解・見方、関わり方に関する項目（2-3、2-4）については、差が見られなかった。また、「2-5 子どもがより良く成長した」については、両年齢クラスにおいて保護者の方が高く回答していた。

年齢クラス間の比較をすると（表5）、保護者が「2-5 子どもがより良く成長した」の項目のみ未満児クラスについて高く回答していた。

双方向性（表6・7）については、主任保育士も保護者も共に自分の方が相手よりも変化していると感じていた。互いに、保育や家庭での子育ての様子を見ることはなく、保育参加（参観）や家庭訪問などの一部の機会を除き、ほとんどが紙面や会話でのコミュニケーションで伝え合うため、相手の変化については実感しにくいのではないかと考えられる。

連携の効果の4項目（2-1～2-4）における主任保育士と保護者の意識の違いを図1・2に示した。これを見ると、主任保育士も保護者も共に相手よりも自身の方が子ども理解・関わり方について変化したと捉えており、そこに年齢差は見られなかった。また、主任保育士は保護者に比べて自身・相手のどちらも変化を高く評価していた。この点については、以下のように考察することができる。保育士の仕事は、保育の専門家であり、日々PDCAサイクルに基づいて保育の質を上げることが求められている。また、一方で子育て支援の観点から保護者がどのように変化しているかについて、よりよく観察し、捉えようとしていると考えられる。しかし、保護者に対しては、保育士ほど子育ての質の向上（変化）を求めることは難しい。これらのことから、主任保育士は自身に対して保護者に対して保護者より変化を高く感じ、この結果につながったのではないかと考えられる。

一方で、子どもの変化（成長）については、保護者が強く実感していた。この点についても、保育士は保育の専門家であることから、成長の見通しが立つため、子

ものの成長に対して、新鮮さと驚きを持って受け止めることが少なくなり、相対的に保護者がより強く子どもの成長を感じることに繋がっているのではないだろうか。保護者は子育ての専門家ではないため、自身の変化を振り返る習慣がないこと、しかし子どもの変化（成長）は主任保育士以上に感じていることから、自身の子ども理解や関わり方よりも子どもの成長に目が向いていることが影響しているのではないかと考えられる。

(4) 連携の工夫について

主任保育士と保護者の回答を比較すると（表4）、頻度の異なる3タイプのコミュニケーションに関する項目（3-1～3-3）のうち、未満児クラスの「3-3 保護者〔保育士〕との間に随時、必要に応じてコミュニケーションが十分に取れている」を除き、両年齢クラスにおいて主任保育士の方が高かった。また、子どもの内面、発達の過程や見通しの情報伝達に関する科目（3-4、3-5）については、以上児クラスにおいてのみ主任保育士の回答が高かった。この点については、保護者は保育士一人を相手にするが、保育士は多数の保護者を相手にするため、各々のコミュニケーションの総量の違いが、結果に反映されてしまったという可能性が考えられるが、今回の研究で確認することはできなかった。

年齢クラス間の比較をすると（表5）、主任保育士は「日常的なコミュニケーション」に関する項目（3-1）のみ、未満児クラスについて高く回答していた。保護者は、「定期的なコミュニケーション」に関する項目（3-2）以外の全項目において未満児クラスについて高く回答していた。主任保育士が捉える以上に、保護者は年齢クラス間でコミュニケーションの量や質に違いがあると感じていることがわかる。

(5) 連携における満足感、信頼関係について

主任保育士と保護者の回答を比較すると（表4）、両年齢クラス共に連携・保育への満足度、信頼関係の構築に関する全ての項目（4-1～4-3）において、保護者の方が高く回答していた。

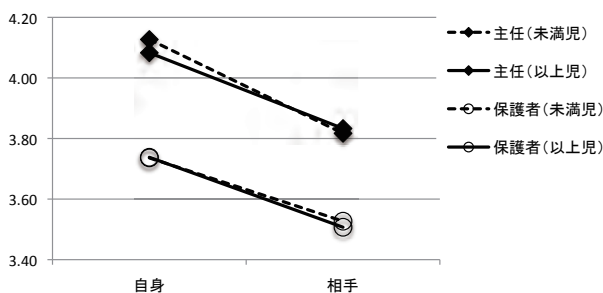


図1 子ども理解・見方の変化

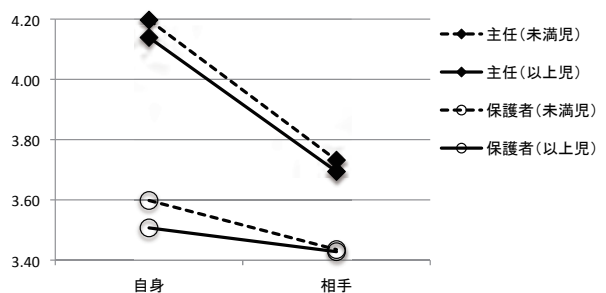


図2 子どもへの関わり方の変化

年齢クラス間の比較をすると（表5）、主任保育士では、「4-1 保護者は保育士との連携に満足している」のみ未満児クラスについて高く回答しているが、保護者は全ての項目（4-1～4-3）において未満児クラスの方が高く回答していた。

これらのことから、連携や保育への満足度、信頼関係については、主任保育士より保護者が高く評価しており、未満児クラスにおいてよりその傾向が強まっていると考えられる。

(6) 保護者の協力について

保護者のみに回答を求めた保護者の協力体制について、年齢クラス間の比較をすると（表5）、「5-1 保育所からの書面での連絡（連絡帳・お便り・掲示板など）」には必ず目を通したり、返事を書いたりしている」については未満児クラスの方が高く、「5-2 保育所の行事などに積極的に参加・協力するようにしている」「5-4 保護者会の活動になるべく協力するようにしている」については、以上児クラスの方が高かった。「5-3 保育所からのお願い（持ち物・提出物など）」に対して、きちんと対応するようにしている」については、年齢間で差は見られなかった。未満児クラスでのみ連絡帳を使用している園は多く、そのことが「連絡の確認・返信」の差に影響していると考えられる。一方で、保育所への協力については、子どもの年齢が上がるにつれて、行事等で子どもの種目数が増える、また保護者会では担う役割が増えるなど、協力する機会が多くなることから、子どもの在籍年数とともに協力するように変化するのではないかと考えられる。

(7) 自由記述について

1) 主任保育士用質問紙調査における自由記述欄の分析

主任保育士用質問紙調査の連携の工夫に関する項目（3-1～3-5）について「保護者の『連携に対する意識』を高めるための以下の保育士の工夫について、該当する欄に○をつけてください」の設問で各項目について回答を求めた後に「その他、保護者の『連携に対する意識』を高めるための工夫がありましたら、具体的にご記入ください」という自由記述欄を設けている。また、満足度・信頼関係に関する項目（4-1～4-3）について「保護者の保育士との連携に対する満足度・信頼関係について、該当する欄に1つ○をつけてください」の設問で各項目について回答を求めた後に「その他、保護者との連携において、こんな機会があると良いと思われる内容がありましたら、具体的にご記入ください」という自由記述欄を設けている。この2箇所の自由記述欄についての分析を行った。

2箇所の自由記述欄の内容をみると、「工夫している点」と「あると良い機会」に対する記述内容には共通する回答が多かった。そこで主な回答内容を以下の通り分類して、その項目ごとの回答人数（延べ人数）によって分析を行うこととした。分析に当たっては、保護者の自由記述と照らし合わせるために、保護者同様の以下の項目ごとの回答人数（延べ人数）によって分析を行うこととした。

- ①保護者と直接話をする
- ②連絡帳の利用
- ③園からのお便り・配布物
- ④掲示物(掲示板・ホワイトボードなど)
- ⑤SNSの利用
- ⑥行事参加(懇談会・保育参加など)
- ⑦その他

なお、保護者の回答も含めた回答数は表8の通りである（二重下線が1位の項目、下線が2位の項目）。

表8 主任保育士と保護者の自由記述の回答

対象	事項		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	延べ件数	回答者数
主任保育士	工夫している点		<u>14</u>	10	5	9	0	<u>12</u>	4	55	33
	あると良い機会		0	1	1	0	0	<u>13</u>	5	20	19
保護者	工夫している点	0～2歳児	<u>69</u>	<u>100</u>	7	14	7	5	12	214	183
		3～5歳児	<u>66</u>	<u>57</u>	8	20	1	12	27	191	168
	あって良かった機会	0～2歳児	27	17	0	1	0	<u>92</u>	31	168	148
		3～5歳児	<u>43</u>	12	0	1	0	<u>91</u>	34	181	147

a) 保育士が工夫している点

「①保護者と直接話をする」に分類できる回答が14名ともっとも多く、半数近い主任保育士が記述している。笑顔、聞き役になる、保護者の様子の観察といった配慮の下での直接の日常的なコミュニケーションへの意識が見られるとともに、お迎えの際に「…子どもを迎えに行く前に、お茶を飲んで一息ついてもらう場を随時設けている」といった工夫も見られた。一方で、「送迎時には話に夢中になって、子どもの対応がおろそかになり危険な場合も予想されること。また、一部の保護者と話し込んでしまい他の保護者への対応がおろそかになってしまうことを考え、当園では送迎時はあいさつ、健康状態の申し送り、特に成長を感じた時等、簡単にするようにしています。…」として連絡帳や掲示、行事等でのコミュニケーションに配慮しているという回答もあった。

「②連絡帳の利用」も比較的多く11名の記述があり、「…こまめに伝え合う」、「…知らせ合い連携を取っている」など双方向のコミュニケーションのツールとして捉えているコメントが見られる。3歳以上児でも毎日連絡帳を交換するようにしている園も見られた。

「③園からのお便り・配布物」は5名の回答があり、保育所からの情報提供に努めている様子がうかがわれる。「毎月・クラス便りで遊びの様子を文章&写真で伝えている。写真を見ることでよくわかるという意見が何人かより聞かれている」といった工夫も紹介されている。

「④掲示物(掲示板・ホワイトボードなど)」は9名と比較的多くの記述があった。「ドキュメンテーション」、「連絡ボード」など呼び方や内容に幅はあるようだが、園での子どもの様子を写真や文字で伝えるという方法が一般化しつつあることがうかがわれる。

「⑤SNSの利用」は0件であった。活用している園は一般的に徐々に増加しているように見受けられるが、園長等が行っていることが多いからか、主任保育士には特に意識されていない。

「⑥行事参加(懇談会・保育参加など)」は12件と多くみられ、クラス懇談、個人懇談、保育参加などが工夫として挙げられている。保護者が親として学ぶための講演会や学習会も実施されている。「1日保育士体験は20年ほど前から行っている。保護者に1日ゆっくり園で過ごし、子どもと関わり遊んでもらい、給食を食べ、午後は個人懇談を設けるという流れにおいて、園への理解を深めるきっかけとなりその後の連携が取れやすくなるのを感じる」という取り組みも紹介されている。

「⑦その他」として4名が記述している。「自分のクラスだけでなく、他のクラスの保護者の話、様子を会議等で伝え合っている」といった取り組みが2件、「年4回、ケース記録を渡し、今現在の子どもの園での様子と、私たち保育士がどう関わっているかを記入、そして今後どう働きかけるかも書いて渡している」という懇談時の工

夫や、積極的な苦情対応に関する記述があった。

b) 保育士があると良いと思う機会

「②連絡帳の利用」、「③園からのお便り・配布物」については、より充実させたいという趣旨の記述があった。

「⑥行事参加(懇談会・保育参加など)」は13名ともっとも多い記述があった。「ティータイムのおしゃべり時間を設けて日頃の子どもの様子について語り合うこと」といった、ざっくばらんに子どもや子育てについて話し合える場を設けたい旨の記述が2名あった。個人懇談の充実など、応答的、個別的なコミュニケーションの機会もより求められている様子がうかがえる。保育士体験への記述が2件あり、「地域に向けて園の開放日を設けることを考えています。地域に広く園を理解していただくことで保護者にもより深く理解と安心をしていただけたかと思います」など地域開放への積極的な意識を示す記述も見られた。また親子ともに参加する行事等への記述が2件見られた。父親が参加する機会を設けたいという記述も見られた。

「⑦その他」は5名の記述があった。「子ども達は遊びながらいろいろな体験の中で学んで成長していること、その学びについて具体的な実践報告をする機会があると良いのではと考えています。今年度は3期の総会の時に、年齢毎に視覚を通して、ミニ発表ができるよう毎月計画的に取り組んでいるところです」など、園での子どもの育ちを伝える機会についての記述も2名見られた。特別な支援を必要とする子どもの保護者が安心できるような機会、保護者同士のコミュニケーションの機会への意識も見られた。

2) 保護者用質問紙調査の自由記述欄の分析

保護者用質問紙調査の連携の工夫に関する項目(3-1~3-5)について「あなたの『連携に対する意識』が高まるような保育士の以下の工夫について該当する欄に1つ○をつけてください」の設問で各項目について回答を求めた後に「その他、保育士がコミュニケーションや連携において工夫していると感じられる点があれば、具体的に記入ください」という自由記述欄を設けている。また、満足度・信頼関係に関する項目(4-1~4-3)について「あなたの保育士との連携に対する満足度・信頼関係について、該当する欄に1つ○をつけてください」の設問で各項目について回答を求めた後に「その他、保育士との連携において、こんな機会があつて良かったと思われることがありましたら具体的にご記入ください」という自由記述欄を設けている。この2箇所の自由記述欄について分析を行った。

なお主任保育士の記述の分析の①「保護者と直接話をする」については「保育士と直接話をする」とした。

①保育士と直接話をする

②連絡帳の利用

- ③園からのお便り・配布物
- ④掲示物(掲示板・ホワイトボードなど)
- ⑤SNSの利用
- ⑥行事参加(懇談会・保育参加など)
- ⑦その他

以下、未満児クラスの保護者の回答と以上児クラスの保護者の回答とに分けて見ていく。

a) 保護者が保育士が工夫していると考えている点

①未満児クラス

回答者の5割を超える保護者が「②連絡帳の利用」について回答している。保護者からの「連絡帳を読むことを楽しみにしている」、「質問したことに答えてもらえる」、「保育園での子どもの様子がよくわかる」などの記述からも、保育士とのコミュニケーションや連携を取るために、連絡帳の利用を頼りにしていることが明らかになった。

「①保育士と直接話をする」についても4割近くの回答があり、保護者からの「直接話ができて嬉しい」、「ささいなことでもきちんと伝えてくれる」、「いつでも相談できる」などの記述からも、保護者自身の安心感が「工夫している点」という回答につながったのではないかとと思われる。また、複数担任の協力体制や、相談しやすい雰囲気づくりなどについても「工夫している点」として書かれていた。

「③園からのお便り・配布物」、「④掲示物」、「⑤SNSの利用」については、「②連絡帳の利用」に加えて、これらも楽しんでいるものの一つとして書き加えられている場合が多かった。「④掲示物」については、写真の利用を挙げている保護者が多く、近年活用が進んでいる「ドキュメンテーション」のような媒体を通じて、子どもが保育園でどのように生活しているのかが目で見て分かるという安心できるということがうかがわれる。

「⑥行事参加」には、行事への参加が子育てを学ぶ機会になっており、子育てについて相談することができ、安心することができたという保護者の思いが書かれていた。

「⑦その他」では「子どもの性格を理解した上でトイレトレーニングをしてくれる」など、子ども一人一人の個人差への配慮や、「本当によくお世話をしてくださっている」など、日ごろの保育に対して感謝の思いが書かれていた。

②以上児クラス

以上児クラスの回答でもっとも多かったのは「①保育士と直接話をする」で4割近い回答数があった。「文面だけでは伝わらないこともあるので、直接話せるとよくわかる」、「帰りに必ず一言話してくださる」というように、担任との会話についての回答の他に、担任以外の保育者からの会話や日常の挨拶など、園全体で子どもを見

ていることを「工夫している点」として回答している保護者も多く見られた。

「②連絡帳の利用」については、3割を超える記述があった。以上児は子ども自身が保護者に園での出来事を話すことができることから、月に1、2回程度の、子どもの様子や、特に保育者が伝えたいことがある時に丁寧に対応することが信頼感を与え、「工夫している点」として受け止められていることが推測される。また、ここでの連絡帳は未満児の毎日の連絡帳とは違って、以上児の出席帳に月1回保育士が記入するものを指す場合もあると思われる。また、回答から、毎日連絡帳のやり取りしている保育園もあることがうかがわれる。

「④掲示物」については、「一度に複数人お迎えに行くと、十分話す時間が取れない事もありますが、部屋の前に今日あった事をボードに掲示してくれている」というように、ホワイトボードなどの利用が「工夫している点」として挙げられていた。また、子どもの作品展示から子どもの成長を感じ取っている保護者の記述もあった。

「⑥行事参加」については、保護者が一日(半日)保育士の経験をすることで、保護者自身が子ども理解を深めるためのきっかけ作りになっていることや、懇談会でじっくり保育士と話ができることの充実感が書かれていた。

「⑦その他」では、必要に応じて電話、メモの交換をするというように、困った時にはいつでも対応してもらえるという記述がある一方、「もう少し連携を取りたい」、「こちらから話しかけるようにしている」、「連絡帳がないと不安」、「特定の人としか話さない」などの、もっと連携を求める意見もあった。

③「工夫している点」についての未満児クラスと以上児クラスの比較

未満児の保護者からは、保育士との会話や連絡帳のやりとりから子育てを学びたい、分からないことを教えてほしいといった姿が現れている。また、子どもの相談をしながらも、保護者自身の子育ての不安も受け止めてもらえることを望んでおり、できるだけ多くの連携を求めていることが推測される。一方、以上児の保護者は、いざという時や行事に向けての取り組みの様子など、連携の回数より必要に応じてしっかり対応してもらえることが満足感に繋がるのではないかと考えられる。

比較すると、回答数で大きく差異がある項目は「②連絡帳の利用」である。以上児の保護者の中にも少数ではあるが連絡帳を求める意見もあるが、ほとんどの保護者は未満児の保護者のように毎日ではなく、月に何度かの連絡帳、または、園からのお便りや掲示物で満足しているという意見が多かった。

b) 保護者がこんな機会があつて良かったと思っている点
①未満児クラス

6割を超える保護者が保育参加や面談、懇談会といった「⑥行事参加」について回答し、他の項目の回答数より顕著に多かった。良かった理由としては、「保育園での子どもの様子を知ることができた」がもっとも多く見られ、次に「先生と子どもとの関わりを見ることができた」という記述が多かった。このことから、保護者が園での様子に加え、保育士の子どもへの関わり方についても知りたいと思っていることが分かる。その他、「担任の先生とゆっくり話すことができた」、「先生や他の保護者と子育ての悩みについて話すことができた」という記述もあり、行事に参加することで、直接自分の目で見たり、保育士と話したり、保護者間で相談しあったりする機会が持てることで、満足感や安心感を抱き、「こんな機会があつて良かった」という回答につながったのではないかと考えられる。

「①保育士と直接話をする」や「②連絡帳の利用」についても回答が比較的多く見られた。これらの項目の良かった理由としては、「⑥行事参加」と同様、「子どもの様子を知ることができる」という回答がほとんどであった。行事参加に「普段よりゆっくり話ができる」、「たくさん話が聞ける」という回答があつたことから、理由が同じであつたにもかかわらず回答人数がさほど多くなかったのは、会話で得る情報量と会話にける時間の長さの違いによるのかもしれない。

「⑦その他」では、保護者自身を思いやる言葉がけや「担任以外の先生からも話しかけてくれる」といった園内の連携のよさがうかがえる対応、子どもの成長やペースに合わせた対応が書かれていた。

「③園からのお便り・配布物」、「④掲示物」、「⑤SNSの利用」については、園の工夫として認められているが、特に「こんな機会があつて良かった」とこととしての記述は見られなかった。

②以上児クラス

未満児クラスと同様に6割を超える保護者が保育参加や面談、懇談会といった「⑥行事参加」について回答し、他の項目の回答数を大きく上回っており、良かった理由として「保育園での子どもの様子を知ることができた」がもっとも多く見られた。また、保育士や保護者同士の交流が良かったという記述も多く見られた。行事の時期や回数増加への希望が若干ではあるが見られた。

「①保育士と直接話をする」は約3割の保護者から「こんな機会があつて良かった」とこととして記述があつた。理由は「子どもの様子を知ることができた」という記述が多いが、「悩みや心配事があるときに、園が特別に時間を取ってくれた」、「いつでも気軽に相談できる」等、単に子どもの様子を知るだけでなく、保護者の不安解消につながるより深い話について、保護者が満足して

いるようであった。

「②連絡帳の利用」については、直接送迎ができない保護者にとっては担任との大切な情報交換のツールになっていることがうかがわれる。また、「育児で悩んでいることを連絡帳に書いたところ、時間外にもかかわらず話を聞いてくれた」という記述があることから、個別相談のきっかけにもなっていることが分かった。しかし、日常の会話が少なく、書面だけでは不満に思っているという保護者も一部に見られた。

「⑦その他」では、「子どもの性格とよく理解してそれに合った対応をしてくれている」等、子ども理解に対しての満足感や、担任だけでなく園全体で連携した対応について満足している記述が多くあつた。

「③園からのお便り・配布物」、「④掲示物」、「⑤SNSの利用」については、園の工夫として認められていることがうかがわれるが、特に「こんな機会があつて良かった」というものとしては記述されていない。

少数ではあるが、保育士と子どもに関することではない話題ができたことが良かったという記述や、保育士よっての対応の差への意見があつた。

③「こんな機会があつて良かった」についての未満児クラスと以上児クラスの比較

未満児クラスの保護者からは、知ることができて良かったという子どもの様子の中で、食事（給食）についての様子、または給食そのもの（内容や配慮）について挙げられていることが多かった。また、「離乳食のペースをお家のペースと合わせて作ってもらえて助かった」、「給食の先生方とのコミュニケーションがとれたことで、食事の問題や悩みの解決に役立った」という記述もあつた。

比較すると、ほとんどの項目において回答数に差はないが、「①保育士と直接話をする」については未満児クラスに比べ、以上児クラスの方が保護者の回答数が多い結果となっていた。

子どもの年齢に関係なく、保護者が「こんな機会があつて良かった」と感じたのは、子どもの様子を知ることができたり、保護者の悩みや問題の解決に繋がったりする保育所の対応であり、また、多くの保育所がそれらについてしっかり対応を考え、工夫し、実行していることがうかがわれる。

(3) 主任保育士と保護者の記述との比較

①保育士（保護者）と直接話をする、②連絡帳の利用、③園からのお便り・配布物、④掲示物（掲示板・ホワイトボードなど）、⑤SNSの利用、⑥行事参加（懇談会・保育参加など）、⑦その他、という分類をもとに比較した結果、保護者の受け止めと保育士の取り組みに大きな齟齬は見られなかった。しかし「工夫している点」については、保護者において⑥はわずかであるが、保育士にお

いてはもっとも多く、保育士の意識と保護者の受け止めに件数の上ではズレが見られる。ただし自由記述の件数をもってそのギャップが実態としてどのようなものであるかについては、解釈に様々な余地がありうる。

いずれにせよ、概ね、日常的で直接的なコミュニケーションを大切にしながら、連絡帳や掲示などのツールを活用し、行事等の機会を通じて効果的で双方向的な連携を図るという保育所側の意図が保護者に概ね伝わっている様子がうかがわれ、かつ肯定的に受け止められていることが推測できる。

未満児の保護者については前述の通り、日々の連絡帳等を通じた頻繁で応答的なコミュニケーションへの評価が高くまたそれを求めていることがうかがわれ、保護者の子育てへの不安等を反映している様子も記述からうかがわれる。

保護者が感じる「あって良かった点」と保育士の「あると良いと思う機会」の回答の傾向は一致しているので、保護者のニーズについて保育士が理解していることがうかがわれ、その実行が課題としてあり得ると考えられる。

研究2 インタビュー調査

1. 目的

研究1の質問紙調査の結果を踏まえ、研究2ではインタビュー調査を行い、研究その一部（保護者の回答を除く）を紹介しながら、保育士の立場からこれをどのように解釈するか、または結果の要因として考えられること等について保育士から直接話を聞き、連携に対する意識を質的に分析することを目的としている。

2. 方法

(1) 対象者：質問紙の回答の段階であらかじめインタビューの同意を得られていた保育所のうちから表9のとおり4カ所を選び実施した。対象者は主任保育士及び可能な場合のみ未満児担当保育士と以上児担当保育士が参加した。

表9 インタビュー実施園と対象の概要

インタビュー実施園	インタビュー対象
A 保育所（公立）	主任、2歳児担当、4歳児担当
B 保育所（私立）	主任、3歳未満児担当
C 保育所（私立）	主任
D 保育所（公立）	主任

(2) 手続き：インタビューは各保育所を調査者が訪問し、実施した。調査者が本研究の趣旨を説明し、質問紙

調査の結果の一部を示しながら、結果と考察に掲げる4つの質問項目に沿って約40分間のインタビューを行った。

(3) 倫理的配慮：インタビュー前に、書面（研究依頼状、同意説明文書）及び口頭による説明を行い、同意書に署名を得ることによって、インタビューの実施、録音、報告集への掲載についての許諾を得た。本研究は、日本保育協会保育科学研究所倫理委員会の審査と承認を受け、実施した。

3. 結果と考察

質問ごとの保育士の見解の概要は次の通りである（(1)～(4)は質問項目）。なお、文章中の「」は保育士の発言として引用したものである。

(1) 保育士と保護者の連携の意識の違い1：連携における対応、満足・信頼関係について保育士が捉えるよりも保護者は概ね高い評価をしている。保育士より保護者が比較的高い評価をしていることについて、なぜだと考えるか（どう解釈できるか）。

園側は、連絡帳のやり取りや送迎時の会話、行事後のアンケート、懇談会などを利用して、保護者に丁寧に接している様子がうかがわれた。「言い回し一つで、今まで培ってきた信頼関係が壊れたりもする」という意識を持って、第一に信頼関係を築こうとする園側の意識が強く働いていると考えられる。

保護者の考え方が変化している様子に対応して、「その子をしっかり見ている」、「あなたのお子さまは、きちんと保育園が責任を持って預かって見ていますよ」というメッセージを出すように気を張っている様子もうかがわれた。

しかし、保育士は保護者にうまく伝えることができたかどうかを確認できていないわけではなさそうだ。園では、保護者の満足について調査するようなことがなく、今回の調査結果として保護者の満足度が示されると、日頃の成果が出たと受け取れるとの感想が聞かれた。そのことは保育士の自信にもつながると受け止められている。

(2) 保育士と保護者の連携の意識の違い2：保育士の子ども理解・関わり方の変化について、保護者よりも保育士の方がより変化したと考えている（保護者の子ども理解・関わり方については、保育士と保護者で差はない）のはなぜだと考えるか。

「保護者と保育士では成長の捉え方や見方が違い、保護者は目に見えて大きな変化がないと気づきにくく、保育士は専門家として小さな変化にも気づくことができる」と言われたように、保育士は小さな変化を見逃さない観察力を有していることを自認していると思われる。保護者が普段家で見ている姿とは違う様子、たとえば、つぶやきをキャッチしたり、友達との関わりの変化をとらえたりするのは、そこに保育士の観察力があるからなのだろう。

このように保育を客観視することができることについて、「保育士自らが努力しているとはいづらい」と控えめな見解ではあったが、客観視できることは、保育士の専門性の一つの現れと見てよいだろう。そして、それは保育士同士が気づき合うといった同僚性によって培われる専門性でもあると考えられる。

保育士の認識が変化するほどには保護者の変化が見られなかったことについて、「保護者の思いに共感していくことで、子どもに対する見方が変わることを期待しているが、変わることを求めなくてもよい」とする見解も見られた。むしろ、保護者には保育所と共に子育ての楽しさを共有してもらいたいという思いの方が強く働くのではないかと考えられる。

(3) 保育士と保護者の情報伝達の違い：保育士も保護者も共に、保育士からの情報伝達（子どもの様子や保育のねらい・内容）が家庭からの情報伝達（子どもの様子や子育ての方針）より多くなっていると感じていることについてどのように考えるか。

「保育士は共通理解と共通意識の下で情報を伝えようという意識を持っているが、保護者は個々の意識の違いがあり、家庭からの情報伝達を多くすることは難しい」、「保護者の方も忙しいということもあり、ゆっくり話す時間を確保するのが難しい」とされる中で、保育園での子どもの様子を保護者にできるだけ話そうという意識がとて強く働いているように見える。これが、保育士からの情報伝達がより多くなっていると感じることの要因と考えられる。

ただ、気がかりな子どもの様子を伝えようとするときや、専門機関を勧めることについては、特に信頼関係が必要との認識がある。保育士は「やはり関係が付いている、付いていないかで、“なぜ、そんなことを言うの”という保護者もいるし、きちんと受け入れてくれて、“いつも見てくれる先生がそう言うってくれるのなら、専門機関に行ってみようかな”と言ってくれる保護者もいる」と述べている。このような日頃の会話の積み重ねが必要である一方で、「4月、5月は信頼関係がなく、特に異動などで担任が変わったりすると、それはできない」との意見も聞かれた。

また、健康面での情報を聞き取ることは重要としながらも、家庭のことを無理に掘り下げて保護者に聞くことはかえって迷惑になるのではないかという抑制も働いて、保護者に合わせながら関わっていこうとする様子が見られた。

(4) 未満児クラスと以上児クラスの連携の違い：連携における対応、連携や保育に対する満足度や信頼関係が、未満児に比べて、以上児では、低くなる（特に保護者）ことについて、どのように考えるか。

未満児クラスと以上児クラスで連絡帳の様式が違っていると、つまり未満児では細かく記入する連絡帳の様式であり、以上児では通常のノート様式であることが影響して

いると考えられている。また、以上児では1クラスの人数が多くなることで、担任と話す機会が少なくなることにも影響していると考えられている。以上児になると基本的な生活習慣の自立ができてくるため、未満児に比べて連携することが減ってくるという見方も出された。

「3歳以上児は伝える力を育むために、子どもたちが自分で伝えることを大切にしているため、3歳未満児に比べたら連携が低いと感じるのではないか」、「年長になったときには、年度始めに、保護者に“お子さんから聞いてください”、“そこでコミュニケーションを取ってください”ということをお願いはしている」の見解に見られるように、以上児になると、発達過程や小学校への接続を意識して園側の対応が変化してくることも要因の一つと考えられる。

以上児において、連携に対する満足度や信頼関係が低くなるのは、子どもが3歳未満のときの、保護者が保育士と情報を密にやり取りしていた状態から脱していく過程のようにも見受けられるが、そのことは連携の意義や必要性を減ずるものではないだろう。むしろ、子どもの年齢が大きくなるにしたがって、保護者の悩みの質が変容することも踏まえて対応する必要があると思われる。保育士は、以上児についても、きめ細かい対応の必要性を指摘しており、「担任の保育士だけでなく、保育士全員が保護者に子どものことを話したり、話を聞いたりすることができるようにすることが必要」とも述べている。

今回のインタビューでは、保育所側（保育士）が様々な機会をとらえて、保護者に子どもの様子を伝えようという意識が働いている様子がうかがわれた。そこには、第一に保護者との信頼関係を築くという気持ちが働いているようである。特に、未満児の場合は、保護者と接する機会や密度という点では以上児と比べて多い印象であり、健康に関わることなどは詳しい情報交換が行われている。

しかし、朝の受け入れの慌ただしさでゆっくりと話ができなかったり、保育士の時差勤務のために担任と話ができなかったりということがあつた。情報の伝達や支援の継続という視点から保護者対応の難しさを指摘する声も聞かれた。また、聞きたいけれども躊躇してしまう保護者や話すことが苦手なタイプの保護者にも園側が気づいていくことが必要だとする見解も聞かれた。

また、保育士による子どもの変化の捉え方（観察力）については、保育士の専門性として評価する必要があると考えられる。すなわち、その子の今の状況について、その子の発達の見通しを持って説明できるという力量を自他共に認める仕組みが必要であろう。そのような自信に裏づけられた専門的力量が、保護者にわが子の理解を促すことにつながり、ひいては家庭との連携をより強固にしていくと考えられる。

総合的考察

質問紙調査とインタビュー調査の結果を踏まえて、以下の項目に従って、保育所と家庭の連携に対する協働性の意識について論じていく。

1. 主任保育士と保護者の意識の共通点と相違点について

両者の共通点については、質問紙調査の項目への回答で、主任保育士と保護者の両者の評定平均値が3以上であったことから、両者が連携に対して概ね良い評価をしているといえる。細かい項目を見ると、連携の対応の中の情報伝達について、主任保育士と保護者の回答に差が見られなかったことから、互いにどの程度情報交換しているのかということについての認識が特に一致していたと言える。

連携の対応において保護者からの情報伝達に比べて保育士からの情報伝達が多くなっていると両者が捉えていた。しかし、この背景について考察すると、相違点が見えてくる。保育士は、インタビュー調査の回答から、保護者の意識が多様であること、保護者が多忙であること、プライバシーへの配慮などから家庭の情報の聞き取りを十分にはできないとしており、家庭からの情報収集が十分でないと感じていることがうかがわれる。保護者については質問紙調査の自由記述から、送迎児の会話、連絡帳、掲示板、行事への参加を通して保育所での子どもの様子を知りたいという要望がある一方で、家庭の様子をもっと聞いてほしいという内容の記述は、（相談するという問題解決を目的とした保護者からの情報伝達を除いて）見られなかった。このことから、保護者は情報伝達の双方向性における情報量の違いを意識しているが、そこに疑問や要望はなく、連携において保育所での子どもの様子を伝えてもらうことを主に捉えていると考えられる。

また、主任保育士、保護者ともに子どもの様子を話すことは多いが、その背景にある保育士や保護者の関わりのおねらいや方針について話すことは比較的少なかった。この点についても、保育士については、忙しい中での時間的制約があり、保育のおねらいよりも子どもの様子を伝えることが優先されること、保護者については、家庭での子どもの様子を話すということに意識があまり向いていない中で、子育ての方針を話すということについては、さらに意識が向きにくいことが背景として考えられる。連携の効果についての考察の中で、保護者が自身の子ども理解や関わり方よりも子どもの成長に目が向いている可能性が示唆されたが、子育ての方針を話すことが少ないことにもそれが影響していると考えられる。

その他の主任保育士と保護者の意識の相違点としては、連携の対応、連携への満足度・信頼関係については、主任保育士に比べて保護者の方が高く評価している項目が多かった。平成27年度保育科学研究（研究代表者：石

川昭義）において、保育士が家庭との連携を「十分にできている」または「だいたいできている」と回答していたが、その認識は保護者においても概ね共有されており、保育士の連携における努力の一部については保育士以上に保護者が高く認められていたといえる。インタビュー調査において保育士が丁寧に信頼関係を構築しようと努力している姿がうかがわれ、自由記述の保育士の取り組みと保護者の受け止めに大きな齟齬が見られなかったことと合わせると、その努力を保護者も大筋で認めているといえる。

一方で、連携の工夫における3タイプのコミュニケーションや子どもの発達の過程や見通しについては、保育士の方ができていると捉えており、各々がコミュニケーションをとる相手の総数が異なることが理由としてあげられるが、今回の研究で確認することはできなかった。連携の効果については、保育士の方が効果を高く捉えており、保育士の専門性の高さが影響していると考えられる。

2. 年齢クラス間の違いについて

主任保育士は連携の対応の多くの項目と保護者の連携に対する満足度について未満児クラスの方が高いと回答していた。保護者においては主任保育士以上にクラス間で意識の差が出ており、今回の研究で縦断的に調べたわけではないが、ここから経年変化を予想すると未満児クラスでは連携を高く評価するが、以上児クラスになると評価が低くなっていくと考えられる。これは、平成27年度保育科学研究（研究代表者：石川昭義）において、未満児クラスの連携が以上児クラスに比べて個別的で詳細であるという結果を支持するものであり、保護者においては保育士以上にその差を強く意識していることが示された。インタビュー調査においても、保育士は連絡帳の形式の違い、生活習慣の自立、以上児になると保育士一人が担当する人数が増えることなどから、連携が変化していくことを認識していた。対応として、子どものコミュニケーション力を生かして情報伝達すること、保育士全員が保護者にきめ細かい対応をしていくことなど、担当する子どもの人数という構造上の問題に対応するような内容が挙げられていた。

保育士については、その専門性から子どもの成長だけでなく子どもに影響を与える保育士や保護者の関わりも含めて、変化を捉える観察力が高いことが指摘された。しかし、未満児クラスと以上児クラスでは、担当保育士の数が異なるという構造上の制約があり、連携の差が出てしまうことについては、保育士自身も捉えていた。質問紙調査において、保育の内容やねらいを伝えることが比較的低いという現状が見られ、普段の連携においてそれらを伝えることが必要であるが、加えて年齢クラスの違いで連携の対応に違いが出てくるという問題に対しても、どのようなねらいや発達の見通しを持って対応して

いこうとしているのかについて、保護者に説明していくことが必要となってくるだろう。そのことが、保護者に子ども理解を促すこと、家庭との連携を強固にしていくことにつながると考えられる。

保護者については、質問紙調査の自由記述から、親になりたてで保育所の支援を求めるという関係性から、子どもの成長とともに徐々に支援される側でなくなるというプロセスが見て取れた。しかし、一方で質問紙調査の情報伝達の差についての考察から、保護者は園から保育というサービスを受ける側であるという意識がうかがわれ、保護者が保育士に家庭の情報を伝え、影響を与えるという意識は強く見られなかった。したがって、保育所に在籍して年月を経る中で、支援される側からの自立という変化は見えて取れるが、協働性を意識するまでには至らないと考えられる。しかし、質問紙調査の保護者の協力体制についての結果では、以上児クラスになるにつれて行事や保護者会への協力が増えており、保育所での保育や連携に対して保護者がなんらかの形で貢献していける可能性があると考えられる。自由記述の結果から、連携の工夫について保護者のニーズを保育士が理解しており、今後その実行が求められるが、その中で保護者と保育士の関係性の変化の過程を踏まえたコミュニケーションのあり方に意図的、計画的に配慮していくことがより求められると考えられる。

3. 今後の課題

保育の専門家である保育士には連携をより強めていく努力が求められるが、専門家ではない保護者に保育士と同程度の努力が求められるとは限らない。また「協働」の説明にあるように「共に子どもを育てる」という共通の目標を持っても、「互いの固有性と主体性を尊重し合うことが求められる関係」であることから、保育士とは異なる連携の内容、方向性があり得る。今回は、保育士

と保護者の連携に対する意識の共通性、相違性を調べるため、同じ内容で比較検討を行ったが、連携において保護者が保育士とは異なる努力や異なる内容、方向性をもって進めていくことの可能性については、今後議論を重ねていく必要があると考えられる。

引用文献

- 林 悠子, (2009). 連絡帳の記述に見る保護者と保育者の関係変容過程. 乳幼児教育学研究, 18, 121-132.
- 石川昭義・矢藤誠慈郎・森 俊之・青井夕貴・西村重稀・鈴木智子, (2015) 保育所と家庭との連携に関する研究. 保育科学研究, 6, 1-21.
- 北野幸子, (2014). 家庭の連携と保育者の専門性. 伊藤良高 (編), 教育と福祉の課題, (pp.75-84). 晃洋書房.
- 那須信樹, (2014). 幼稚園における日常的な保育実践の可視化による「子育て支援」の実際～在園児保護者との日常的な連携を中心に～. 保育の実践と研究, 18, 14-28.
- 小川 晶, (2011). 保育所における高学歴・高齢初出産母子に対する支援：母親と保育者の関係構築を基軸として. 保育学研究, 49, 51-62.
- 大豆生田啓友, (2016). 家庭との連携と保育. 日本保育学会 (編). 保育学講座5保育を支えるネットワーク支援と連携 (pp.27-46). 東京大学出版会.
- 前原 寛・大場幸夫, (2003). 保育と子育て-保育者論考 (3): 可視化すべきことは何か. 日本保育学会第56回大会発表論文集, 696-697.
- 坂崎隆浩・北野幸子・梶沢幸苗・東口房正・田和由里子・筒井桂香・永田久史・田中啓昭・高月美穂, (2013). 安全・安心：地域と子どもの環境：保育ドキュメンテーションを用いて. 保育科学研究, 4, 1-13.
- 山縣文治・柏女靈峰 (編), (2009). 社会福祉用語辞典. ミネルヴァ書房.